

拠点形成概要及び採択理由

機 関 名	北海道大学		
拠点のプログラム名称	境界研究の拠点形成：スラブ・ユーラシアと世界		
中核となる専攻等名	スラブ研究センター		
事業推進担当者	(拠点リーダー) 岩下 明裕	教授	外20名
[拠点形成の目的]			
<p>日本では個別研究として未組織のまま進められている境界事象にかかわる研究（ボーダー・スタディズ）を、北海道という地の利を活かし、スラブ・ユーラシア地域を中心とした研究蓄積及び人文・社会系の広域・比較にかかわる教育研究の知的インフラに糾合し、総合的な学問複合領域の拠点を立ち上げる。さらに、北海道大学におけるこの拠点形成を梃子に全国の境界研究を集約し、当該研究に関する学会を創設し、日本における各研究を国際的な標準のなかで位置づけ発信する。欧米の諸学会と協力し、世界的なネットワーク形成を主導するとともに、この拠点とネットワークを基礎に、内外の地域にかかわる実践とも連携した次世代研究者及び実務家の養成・教育を行う。</p> <p>とくに本拠点は、主として言語的制約から研究の「空白地帯」となっている、スラブ・ユーラシア地域（ロシア・中央アジアなど）や東アジア（中国・韓国）で関連研究を組織し、ネットワーク連結のハブの役割も果たす。北大の人文・社会系大学院及び総合博物館の連携により、境界研究に関する教育機能（博物館展示における一般向け教育の推進と普及、学部における横断型プログラムの創設、大学院における次世代養成コースの立ち上げ、全国の若手研究者の育成とサポートなど）を充実させ、日本における当該分野における研究と教育の両面を牽引することになる。</p>			
[拠点形成計画の概要]			
<p>境界事象とは、人間が生存する実態空間そのもの及びその人間の有する空間及び集合認識のなかで派生する差異化（つまり、自他の区別）をもたらすあらゆる現象を指し、いわば境界研究はその形成及び変容ならびに紛争回避メカニズムの解明である。現代社会においては、実態空間としては国と国の接点（国境）や民族と民族が対立あるいは協力する様々な衝突点が存在する。そしてそのボーダーに分断あるいはボーダーを跨いで生活する人々はその実態に左右されながらも、ある場所では自他の認識を鮮明に、別の場所ではグラデーションをもって表象する。そして、もとよりこれらの境界は実態も認識もズレを抱え込みながら、歴史のなかで再生産され続ける。本拠点はこのような境界事象にかかわる問題をどのように読み解くかという問題意識を共有しつつ、具体的なエリアにおいて問題の存在を探り、その問題の様態を考察し、解決方法を模索し、その実現に向けて提言をも行う。本拠点がスラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧地域）を軸とした地域研究の成果をもとに、世界に広げようとするのは、冷戦終結後、まさに空間の解体と再編を通じて、実態と表象の双方においてこの境界事象を様々な様態で表出させたのがこのエリアだからである。そして、このエリアとその隣接地域で生じた事象は、ある意味で世界の地域紛争や対立・統合を理解する様々な手がかりを与えてくれよう。</p> <p>北海道大学は日本において境界事象にかかわる研究とその教育を実践する最適なポジションをもつ。第1に地理的・歴史的な意味での境界にあり、東アジアのみならず、（広い意味でヨーロッパ文化につながる）ロシアを軸とした他地域・他文化との接触前線にたつ。第2にスラブ研究センターなる当該地域研究における全国共同利用施設をもち、スラブ・ユーラシア地域研究のこれまでの成果を発展させることで本拠点形成の中心を担える。第3に、スラブ・ユーラシア及び隣接地域の実態研究を担うスタッフを有するのみならず、かつ境界にかかわる差異化をもたらす全ての関係性や境界表象にかかわる研究領域を担うべき人材が、各人文・社会系大学院研究科に散在している。なかでも文学研究科の多様な人的リソース及びこれまでの教育成果は、人材育成において人文・社会連携の教育を牽引することをも可能とする。これらの教育・研究の機能を本拠点に集約できれば、これを当該分野の教育・研究に関して全国を主導しうる地位に高めうる。第4に総合博物館の存在。フィールドワークの知見を集積し、かつ現場の臨場感で教育しうる博物館との連携により、地域研究の新たなアプローチとその総合による成果を斬新なスタイルで内外に発信しうる。</p> <p>これらの研究・教育プロセスを推進することで、本拠点は各エリアの個別的な事象研究としての「蛸壺」的現状をいまだ十分に脱していない地域研究を、境界研究のアプローチにより、人文・社会系の新領域として立ち上げる。以下にポイントを列挙する。</p>			
<ol style="list-style-type: none"> <li>1) スラブ研究センター、文学研究科、博物館などを中心にコア・メンバーを組織。</li> <li>2) 境界事象にかかわる実態研究と表象研究の2グループに区分。それぞれにスラブ・ユーラシア地域を軸とした研究班と広域の観点から比較や理論を担う教育・研究班を配置。</li> <li>3) 年前半は研究のネットワークづくり・後半は日本国境学会の創設・世界学会との連携実施。</li> <li>4) 境界をめぐる紛争解決に対して、内外の関係機関に対する政策的提言。</li> <li>5) 北大人文・社会系を統合する教育プログラムの創出。内外の次世代研究者の養成。</li> </ol>			

機 関 名	北海道大学
拠点のプログラム名称	境界研究の拠点形成:スラブ・ユーラシアと世界
[採択理由]	
<p>21世紀COEプログラム「スラブ・ユーラシア学の構築：中域圏の形成と地球化」による優れた研究成果を活かしながら、新たな分野への具体的な展開が構想されており、優れたプログラムであると評価できる。</p> <p>人材育成面においては、学際的展開のための広範囲な研究科との連携、国際的展開のための若手研究者の海外派遣、実践的展開のためのフィールドワークなどが計画されており、過去の教育実績からその実効性が期待できる。</p> <p>研究活動面においては、これまで質の高い研究成果を有し、欧米の関連学会との国際的なネットワークも構築されており、研究連携の実効性が大いに期待できる。</p>	